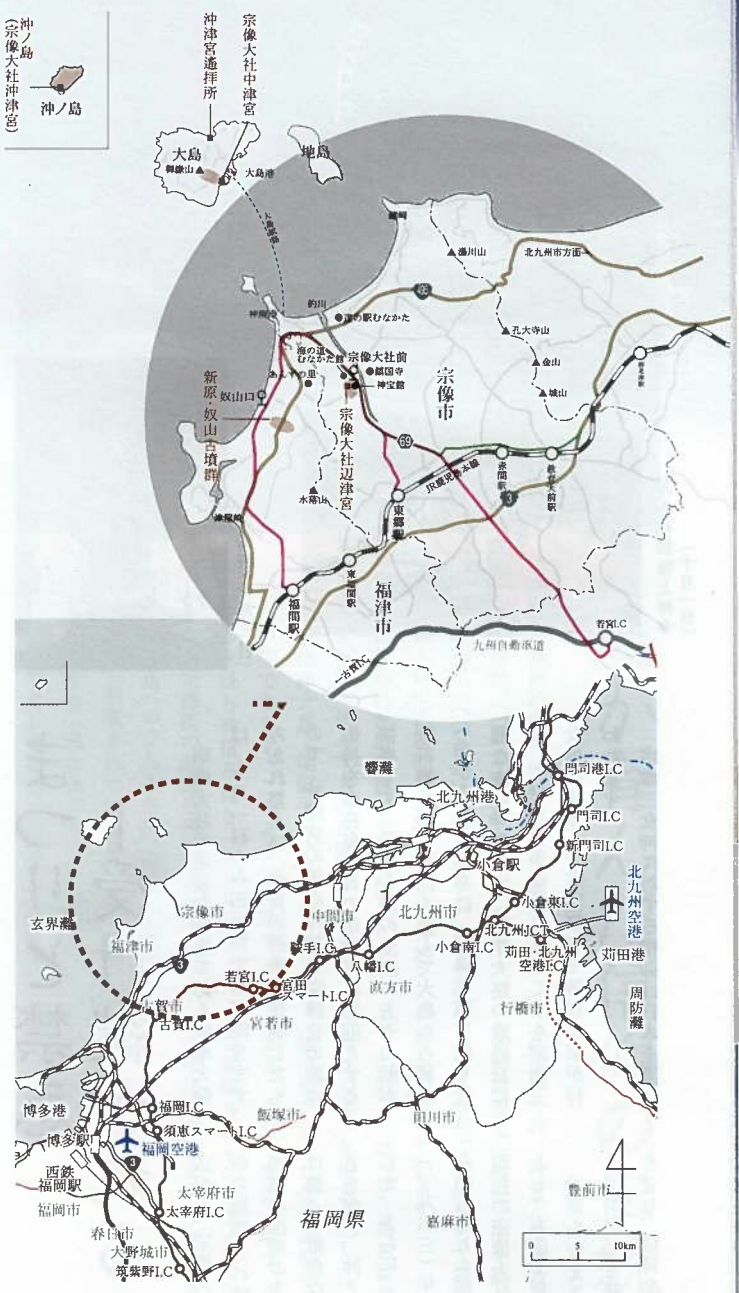
◀沖ノ島祭祀と宗像大社の成立



アクセス

宗像大社辺津宮

- JR鹿児島本線東郷駅下車。東郷駅前より西鉄バスで「宗像大社前」（神湊波止場　行き）下車すぐ
- 古賀インターチェンジから車で30分・
- 若宮インターチェンジから車で20分

宗像大社中津宮

［神湊までのアクセス］

- JR鹿児島本線東郷駅下車。東郷駅前より西鉄バスで「神湊・波止場（終点）」下車
- 古賀インターチェンジから車で40分
- 若宮インターチェンジから車で30分

［神湊からのアクセス］

- 市営渡船大島行き乗船、大島フェリーターミナルから徒歩3分

新原・奴山古墳群

- JR鹿児島本線福間駅下車。福間駅前よりふくつミニバスで「昭和学園前」下車すぐ
  または西鉄バスで「奴山口」下車徒歩20分

《お問い合わせ》
「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
事務局：福岡県世界遺産登録推進室
Tel：092-643-3162　Fax：092- 643-3163
Email：sekaiisan@pref. fukuoka.lg.jp
www.okinoshima-heritage.jp　宗像沖ノ島　検索

平成27年9月発行

◀遺産群の価値

ユネスコ世界文化遺産国内推薦候補

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群とは

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、「神宿る島」を崇拝する伝統が古代から今日まで発展し継承されてきたことを物語る稀有な物証です。

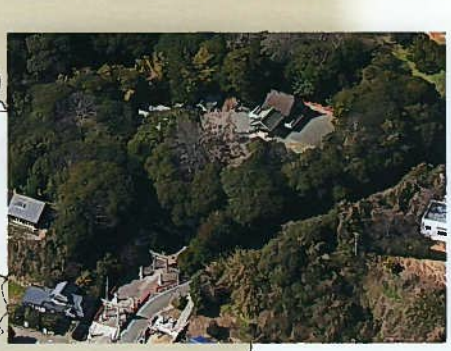
四世紀から九世紀の間、東アジアにおける海を越えた活発な交流を背景におびただしい量の貴重な奉献品を用い、航海の安全と交流の成功を祈る祭祀が沖ノ島で行われました。

七世紀後半には、大島や九州本土でも沖ノ島と共通する古代祭祀が行われるようになり、宗像三女神への信仰が生まれました。

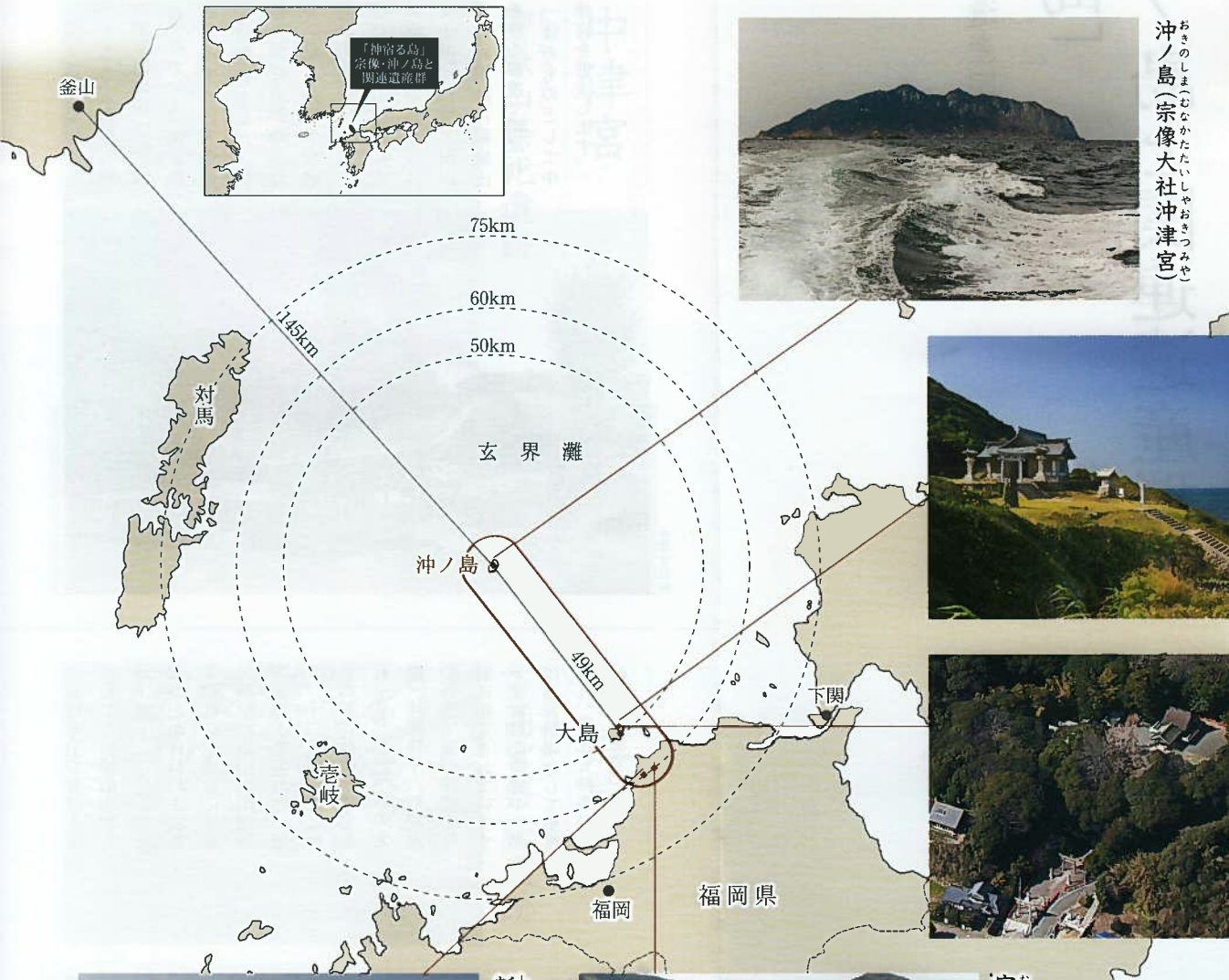
「神宿る島」に対する信仰を育んだ宗像地域の人々によって、厳格な禁忌などの伝統とともに信仰は現在に至るまで受け継がれてきました。

沖ノ島（宗像大社沖津宮）

沖津宮遙拝所



宗像大社中津宮



新原・奴山古墳群

宗像大社辺津宮

世界遺産としての価値（顕著な普遍的価値）

沖ノ島（宗像大社沖津宮）は、日本列島から朝鮮半島・中国大陸へと向かう航路において道標となる島であり、その荘厳な形状ゆえに、神宿る島として信仰の対象となっていました。

四世紀後半、東アジアにおける交流が活発化すると、沖ノ島で航海の安全と対外交流の成就を願う祭祀が行われました。沖ノ島祭祀は、日本の「古代国家」（ヤマト王権・律令国家）が関与した祭祀として「国家的祭祀」と称されていますが、海を越えた交流に従事し、沖ノ島祭祀を担った宗像氏の協力なしでは実現できませんでした。

沖ノ島祭祀遺跡は、信仰に基く禁忌などによって手つかずの状態で良好に保存されてきました。発掘調査では約八万点の貴重かつ大量の奉献品が出土し、それらはすべて国宝に指定されています。また、その祭祀形態は四世紀後半から九世紀末までに、岩上（がんじょう）祭祀―岩陰（いわかげ）祭祀―半岩陰・半露天祭祀―露天（ろてん）祭祀の四段階の変遷をすることが明らかとなりました。

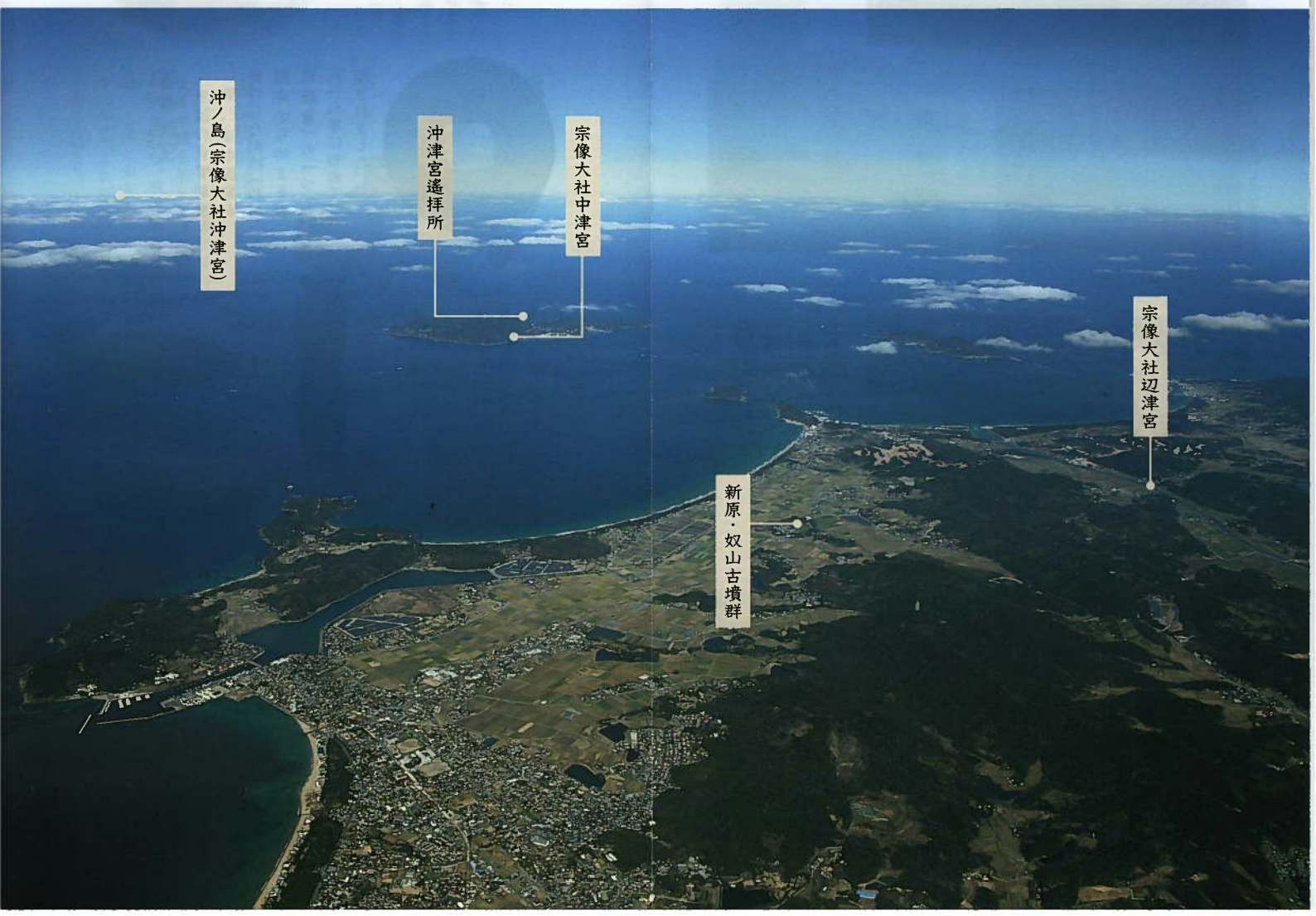
沖ノ島祭祀遺跡は、古代日本において、自然崇拝から次第に祭祀儀礼が整い、現在につながる信仰が形成されてゆく過程を証明する唯一の祭祀遺跡です。

新原・奴山古墳群は、沖ノ島に対する信仰を支え、沖ノ島祭祀を奉斎した宗像氏の墳墓群です。宗像氏は、五～六世紀にかけて入海に面した台地上に墳墓群を築きました。この台地上からは、大島、さらに沖ノ島・朝鮮半島へと続く海を一望することができます。新原・奴山古墳群は、沖ノ島に対する信仰を支える宗像氏の存在を証明します。

露天祭祀の段階になると、大島と九州本土においても、沖ノ島祭祀と同様の祭祀が行われるようになりました。三箇所の祭祀の場は、宗像三女神が鎮座する地として『古事記』『日本書紀』に「沖津宮」「中津宮」「辺津宮」と記されています。これは、三箇所の祭祀遺跡の存在が同時期の文献の記述と一致する非常に珍しい事例です。沖ノ島（宗像大社沖津宮）、**宗像大社中津宮**、**宗像大社辺津宮**という三つの宮で構成される宗像大社は、宗像三女神に対する信仰の場として海で結ばれた広大な境内域を形成しています。

大島の北側に設けられた**沖津宮遙拝所**は、厳格な禁忌によって立ち入りが制限されている沖ノ島を大島から拝むためのもので、沖ノ島に対する信仰の継承を伝えています。

このように、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、「神宿る島」を崇拝する伝統が、古代から今日まで発展し、継承されてきたことを物語る稀有な物証です。



遺産群の形成過程

四世紀後半に始まった沖ノ島祭祀は、岩上から岩陰を経て露天祭祀へと祭祀形態が変遷していきます。岩陰祭祀が行われていた五～六世紀には、祭祀を担った宗像氏が沖ノ島へと続く海を望む台地上に新原・奴山古墳群を築きます。大型の前方後円墳（二十二号墳）は、岩陰祭祀が始まった五世紀後半に築かれた古墳です。中型の前方後円墳（十二号墳）は六世紀前半～中頃に築かれました。台地の縁辺部に築かれた小型の円墳群（三十四～四十三号墳）は六世紀後半のものです。宗像地域でも数少ない方墳である七号墳からは、沖ノ島祭祀遺跡の出土品と共通した鉄斧が出土しています。

七世紀後半になると、祭祀は大島と九州本土へも広がります。これらの祭祀の場が御嶽山祭祀遺跡、下高宮祭祀遺跡です。三箇所の祭祀の場は、宗像三女神が鎮座する地として八世紀初めに編纂された『古事記』に「奥津宮」「中津宮」「辺津宮」、同じく『日本書紀』に「遠瀛」「中瀛」「海浜」と記されています。時代が降ると祭祀遺跡の近くに社殿が建てられますが、三つの宮は社殿だけでなく、祭祀遺跡を含む信仰の場全体を指しています。現在は沖津宮の社殿に田心姫神、中津宮の社殿に湍津姫神、辺津宮の社殿に市杵島姫神が祀られ、それぞれ信仰の場として古代より受け継がれています。現在、宗像三女神に対する信仰は宗像地域から日本全国へと広がっています。さらに、十八世紀までには、沖ノ島そのものをご神体として拝む拝殿の役割を果たす沖津宮遙拝所が大島の北側に設けられます。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、五つの構成資産が一つとなってはじめて「神宿る島」を崇拝する伝統が古代から今日まで発展し継承されてきたことを物語ります。

沖ノ島（宗像大社沖津宮）
―田心姫神―

沖津宮遙拝所

宗像大社中津宮
―湍津姫神―

宗像大社辺津宮
―市杵島姫神―

新原・奴山古墳群

空から見た新原・奴山古墳群

三十四～四十三号墳

二十二号墳

七号墳

十二号墳

七号墳出土の鉄斧

みあれ祭海上神幸（十月一日）

みあれ祭陸上神幸（十月一日）

神奈備祭（十月三日）

海が育んだ信仰の伝統

古代の入海

辺津宮の側を流れる釣川はかつて入海でした。『日本書紀』では、「海浜」と書いて「へつみや」と読ませています。新原・奴山古墳群も入海に面した台地上に築かれた墳墓群です。台地上に立つと、海を挟んで大島が間近に迫り、さらに沖ノ島、朝鮮半島へと向かう海を一望できます。このような立地は、その死後も神宿る島と一体となろうとする宗像氏の意識を表しています。

沖ノ島への立ち入りは、厳格な禁忌によって制限されているため、沖ノ島を遙拝する（遙か遠くから拝むこと）伝統が生まれました。大島の北側の海辺、遠く沖ノ島を望む場所に設けられた沖津宮遙拝所は、海を隔てて沖ノ島そのものをご神体として拝む拝殿の役割を果たしています。

このように、沖ノ島を起源とする信仰は大島、九州本土へと広がり、海で結ばれた広大な信仰の場を形成しています。そして信仰の場は、周囲の良好な景観とともに宗像地域の人々によって現在に至るまで守られてきました。

まつりと禁忌
―受け継がれる信仰―

宗像大社の重要な神事である秋季大祭は、十月一日のみあれ祭で幕が開きます。みあれ祭とは、中世の神事を復興したもので、沖津宮の田心姫神と中津宮の湍津姫神を市杵島姫神の辺津宮にお迎えする神事です。宗像七浦の漁師の方々の船が数百艘もの大船団を組んで大島から神湊（こうのみなと）へ向かう海上神幸は、宗像地域で最も壮麗な海の神事です。秋季大祭の最終日には、大祭が無事斎行されたことを宗像三女神に感謝し、高宮祭場で神奈備祭（かんなびさい）が行われます。

宗像三女神に対する信仰は日本全国に広がり、宗像大社はその原点として、人々から崇敬され続けています。特に、宗像地域の漁師の方々の沖ノ島に対する信仰は篤く、献魚などして豊漁や漁の安全などを願い、沖ノ島を現在まで守ってきました。さらに、宗像大社では、昭和三十八（一九六三）年から日本で初めて交通安全のお守りを授与するようになりました。現在の宗像大社は、陸上の交通安全の神としても広く信仰を集めています。

神事を支える宗像地域の人々は、現在までかたちを変えながらもまつりや禁忌を守り、信仰を受け継いできたのです。

沖ノ島の禁忌

厳格な禁忌により、沖ノ島や祭祀遺跡はほぼ手つかずのまま現在まで守られてきました。

「禊（みそぎ）」

一般の人の上陸は認められていない。年に一度、男性二百名に限り参拝が許される沖津宮現地大祭の時や十日交替で島に常駐する神職であっても、必ず着衣を全て脱いで海に浸かり心身を清める禊をしなければ、島内に入ることは許されない。

「不言様（おいわずさま）」

沖ノ島で見たり聞いたりしたことは一切口外してはならない。

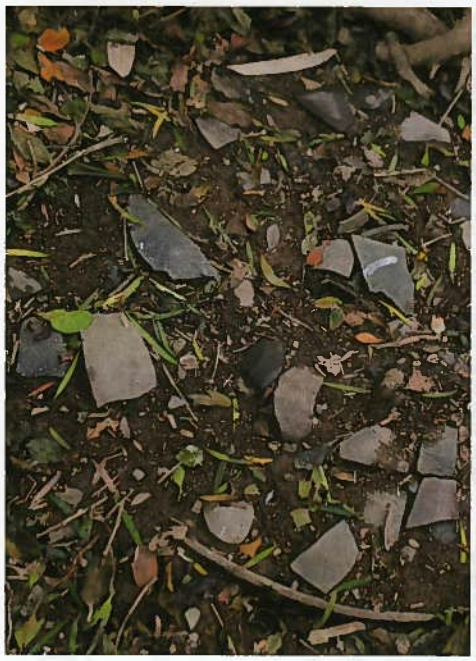
「一木一草（いちぼくいっそう）一石（いっせき）たりとも持ち出してはならない」

沖ノ島からは何一つ持ち出してはならない。江戸時代にこれを破ったことで祟りが起きたという伝承がある。

イラスト／北野陽子

沖津宮

沖ノ島露天祭祀遺跡



十七世紀までには古代祭祀が行われた巨岩群の間に社殿が築かれます。また、十八世紀までには沖ノ島をご神体として拝殿の役割を担う沖津宮遙拝所が大島に設けられます。

沖津宮遙拝所社殿

沖津宮社殿

中津宮

御嶽山（みたけさん）祭祀遺跡

御嶽山祭祀遺跡出土の奈良三彩

御嶽山祭祀遺跡出土の滑石製品

沖ノ島を望むことができる大島最高所の御嶽山山頂（二二四m）において、沖ノ島と共通する露天祭祀が行われました。御嶽山祭祀遺跡からは沖ノ島と同様の奉献品が出土しています。後に御嶽山の麓に中津宮社殿が建てられますが、社殿と御嶽山祭祀遺跡は御嶽山を登る参道で結ばれ、一体のものとして中津宮を形成します。

中津宮社殿

辺津宮

下高宮（しもたかみや）祭祀遺跡

高宮祭場

滑石製舟形型

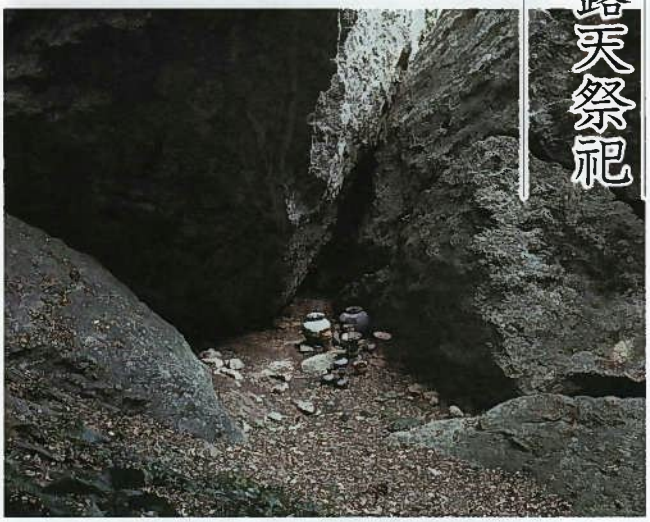
九州本土でも旧入海に面した宗像山中腹で沖ノ島と共通する露天祭祀が行われました。下高宮祭祀遺跡には沖ノ島や御嶽山と同様の奉献品が散布しています。十二世紀までにはその麓に社殿が建てられており、現在の本殿・拝殿は十六世紀末の再建で国の重要文化財に指定されています。下高宮祭祀遺跡の一部は高宮祭場として整備され、現在も神事が行われています。

辺津宮社殿

半岩陰・半露天祭祀

（七世紀後半～八世紀前半）

わずかな岩陰と大部分の露天との両所にまたがって行われた祭祀です。五号遺跡では土器を規則的に並べて祭祀が行われたことが分かっています。



五号遺跡

唐三彩長頸瓶（とうさんさいちょうけいへい）

三色の色彩を施す唐三彩は唐の技術でしか作ることができませんでした。沖ノ島は、中国国外で初めて出土が確認された事例です。

撮影／藤本健八

金銅製龍頭（りゅうとう）

竿の先に付けて唇の孔から天蓋や幡を吊り下げるのに使われました。敦煌莫高窟の壁画にこれと似たものが描かれています。日本での出土例は沖ノ島だけです。

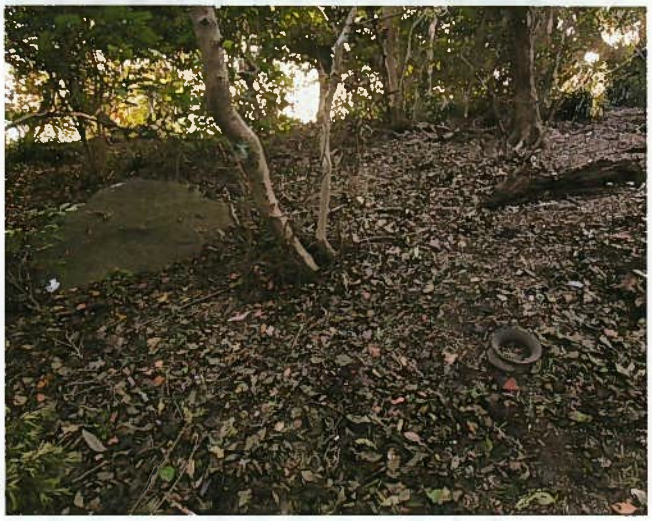
雛形五弦琴（ひながたごげんきん）

祭祀のために作られた実用品のミニチュアです。伊勢神宮のご神宝にも同様の琴があり、沖ノ島祭祀は日本の祭祀が確立していく様子を示します。

露天祭祀

（八世紀～九世紀）

八世紀になると、巨岩群から離れた平坦地で祭祀が行われるようになります。一号遺跡は一九四㎡の範囲に大量の奉献品が出土しており、何度も繰り返し祭祀が行われたことでわかります。



一号遺跡

奈良三彩小壺（ならさんさいこつぼ）

唐三彩の技術をもとに日本で作られた陶器です。大島の御嶽山祭祀遺跡でも、同様の奈良三彩が出土しており、沖ノ島露天祭祀との共通性を物語ります。

富寿神宝（ふじゅしんぽう）

中国の貨幣制度に倣い、律令国家が発行した銅銭（和同開珎から始まる古代銭貨）の一つで、八一八年に初めて鋳造されました。

滑石製形代（かっせきせいかたしろ）

露天祭祀では、地元の滑石を用いた形代（本物に似せてつくった神への奉献品）が数多く奉献されました。人形（ひとがた）、馬形（うまがた）、舟形（ふながた）が出土しています。

六六〇　百済が滅亡する。

六六三　白村江の戦いで唐・新羅が日本を破る。

六六八　高句麗が滅亡する。

六七六　新羅が朝鮮半島を統一する。

七〇一　大宝律令が制定される。

七一〇　平城京に遷都する。

七一二　『古事記』が完成する。

七二〇　『日本書紀』が完成する。

七九四　平安京に遷都する。

八三八　最後となる遣唐使が派遣される。

八九四　菅原道真が遣唐使計画の中止を提言する。

九〇七　唐が滅亡する。

岩上祭祀

（四世紀後半～五世紀）

沖ノ島祭祀は、岩の上で祭祀を行う岩上祭祀と呼ばれる祭祀形態から始まります。鏡、装身具、武器、工具などの奉献品が、供えられた当時の状態で出土しました。二十一号遺跡では、巨岩の上の祭壇が確認されています。

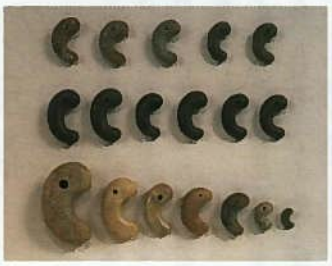
二十一号遺跡

鏡

古代から鏡は特別な祭祀道具とされてきました。沖ノ島では、ヤマト王権からもたらされた鏡が七〇面以上出土しています。国内の祭祀遺跡でこれほどたくさんの鏡が出土した例はありません。

勾玉

沖ノ島では勾玉を筆頭に多種多様な玉類が奉献されています。その材質もヒスイ、ガラス、水晶、メノウ、コハク、滑石など多岐にわたります。



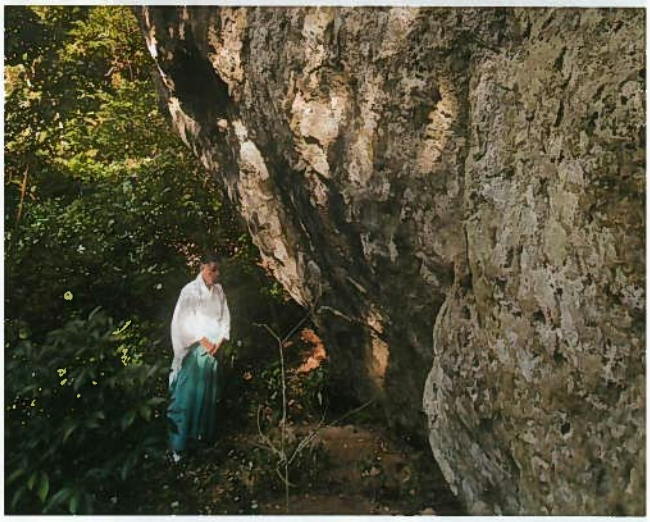
鉄剣

沖ノ島ではいわゆる「三種の神器」にあたる鏡・剣・玉が揃って奉献されました。古代の祭祀において剣は重要な要素であり、またヤマト王権が朝鮮半島との交流を開始した大きな理由の一つに鉄資源の確保があります。

岩陰祭祀

（五世紀後半～七世紀）

五世紀後半から七世紀頃になると、庇状になっている巨岩の陰を祭祀の場とする岩陰祭祀の段階となります。調査時には奉献品が枯葉の下に当時のままの状態で残されていました。



七号遺跡

馬具

雲珠、杏葉といい、新羅からもたらされた馬具の一種です。雲珠は馬に取り付ける紐の交差するところにつけられる金具で、杏葉はその紐にさげる飾りです。

杏葉

雲珠

金製指輪

同じ種類の指輪が韓国慶州の王陵から出土しており、新羅との直接的な関係を裏付ける奉献品です。

カットグラス碗片

浮出円形のカットグラス碗の一部です。イランのギーラーン地方や中国でも類似のものが発見されており、シルクロードを通ってもたらされました。

倭の五王の時代

四世紀後半　倭と百済との結びつきが強まり、沖ノ島で顕著な祭祀が行われるようになる。

三九一　倭、高句麗と戦う。

四二一　倭王讃、中国南朝の宋へ遣使を行う。

四七八　倭王武（雄略天皇）、宋へ遣使を行う。

五三八　百済から日本へ仏教が伝わる。

五八九　隋が中国を統一する。

六〇七　小野妹子が遣隋使として派遣される。

六一八　隋が滅亡し、唐が建国する。

六三〇　初めての遣唐使が派遣される。

六四五　大化の改新（乙巳の変）

新原・奴山古墳群 築造期